

補足スライド

『2.人間と労働』への補足

## 生命・物質代謝・自己

この講義の生命論についての補足

## 生命

- 存在としての生命
  - ・生命の物質的基盤に力点を置く考え方
    - 古典的にはタンパク質、  
現代的にはゲノム（遺伝情報）
- 運動としての生命
  - ・生命のふるまいに力点を置く考え方
    - 古典的には物質代謝

## 物質代謝論についての補足

- 物質代謝 (metabolism, Stoffwechsel)  
= 質料変換 = 素材変換
  - ・生物を物質的に形成し、生命を維持する運動  
|| すなわち
  - ・生命活動（運動としての生命）そのもの

## 物質代謝の古典的イメージ

- 生物は、——
  - ① 必要なものを周りの自然から手に入れて  
不要なものを周りの自然に還す  
ということを通じて
  - ② 自分というユニットを維持し、  
種として存続する。

試験範囲外

## 現代生物学の物質代謝論へ

- ① だけに着目すると、物質代謝は——
1. 異化 (catabolism)  
= 有機物の分解によるエネルギーの獲得
  2. 同化 (anabolism)  
= エネルギーの使用による有機物の合成
- という純粋な化学的過程に帰着する。

参考

試験範囲外

## 現代生物学の物質代謝論の問題

- このような化学的過程として定義すると、  
物質代謝は、  
細胞レベルの反応（細胞内での質料変換）  
に帰着する。
- しかし、この定義では、  
多細胞生物の場合には、  
物質代謝は、  
個体の生命（生死）から独立してしまう。

参考

### 個体としての“自分”

- 私の髪の毛は、私の頭に生えているなら私の一部分であり、脱毛したら私の一部分ではない。
- 私の心臓は、私が生きているなら私の一部分であり、私の死後、別人に移植されたならその人の一部分である。

### 物質代謝から自己へ

- 物質代謝によって私という生命は、——
  - ・ なによりも 個 (=個体) としての自己を再生産し、
  - ・ それをつうじて 種 (=種族) としての自己を再生産する。

試験範囲外

### この講義の生命論(1)

1. 「生命」においては運動としての生命を扱う。
  2. 生命を維持するべき「物質代謝」においては、化学的反応を通じて形成される“自己”に着目する。
    - ☞ ところが
      - ・ 完全に“自己”を実現できたのは人間だけである。
- ↓ したがって……

参考

試験範囲外

### この講義の生命論(2)

- 人間という、最も発達した生命を基準にして、その他の生命を扱う。
- その長所
  - ・ 人間的生命の特徴を、他の生命との比較で明らかにすることができる。
- × その短所
  - ・ 生物と無生物との境界の定義については無力である。というか、そもそも問題にしないし、できない。

参考

### 人間特有の物質代謝

- “自己”の形成を通じて、人間は他の生物と共通な物質代謝とともに、人間特有の生命活動をも展開する。
  - ・ 例えば、CDで音楽を聴くのも人間の生命活動には必要なもの。
- この講義で「物質代謝の効率的・社会的運営」という場合の「物質代謝」も、(生物学のそれとは違って)このような人間特有の生命活動を含む。